調査報告

長尾山の古墳群（Ⅴ）

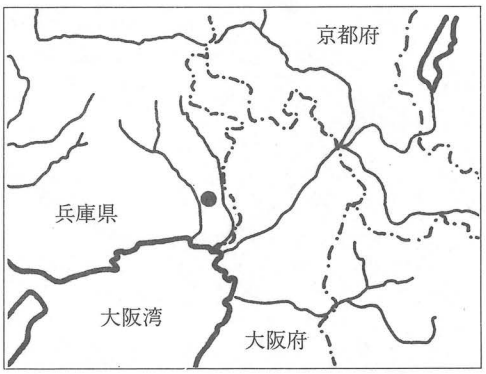
― 天満神社古墳 ―

関西学院大学考古学研究会

Ⅰ　はじめに

関西学院大学考古学研究会は、1976年より、西摂平野、とくに長尾山をフィールドとして研究活動を行い、長尾山に存在する後期古墳群に関する基礎資料として「長尾山の古墳群」と題した調査報告を続けている。その活動の一環として、今回は長尾山の古墳群のうち、山本古墳群Ｃ支群にただ一基現存する天満神社古墳について報告する。

なお、今回の調査にあたり、宝塚市教育委員会の直宮憲一氏、芦の芽グループの古川久雄氏のお二人からご指導、ご協力をいただいた。誌上ではありますが、厚く御礼申し上げます。



第１図　長尾山の古墳群の位置図

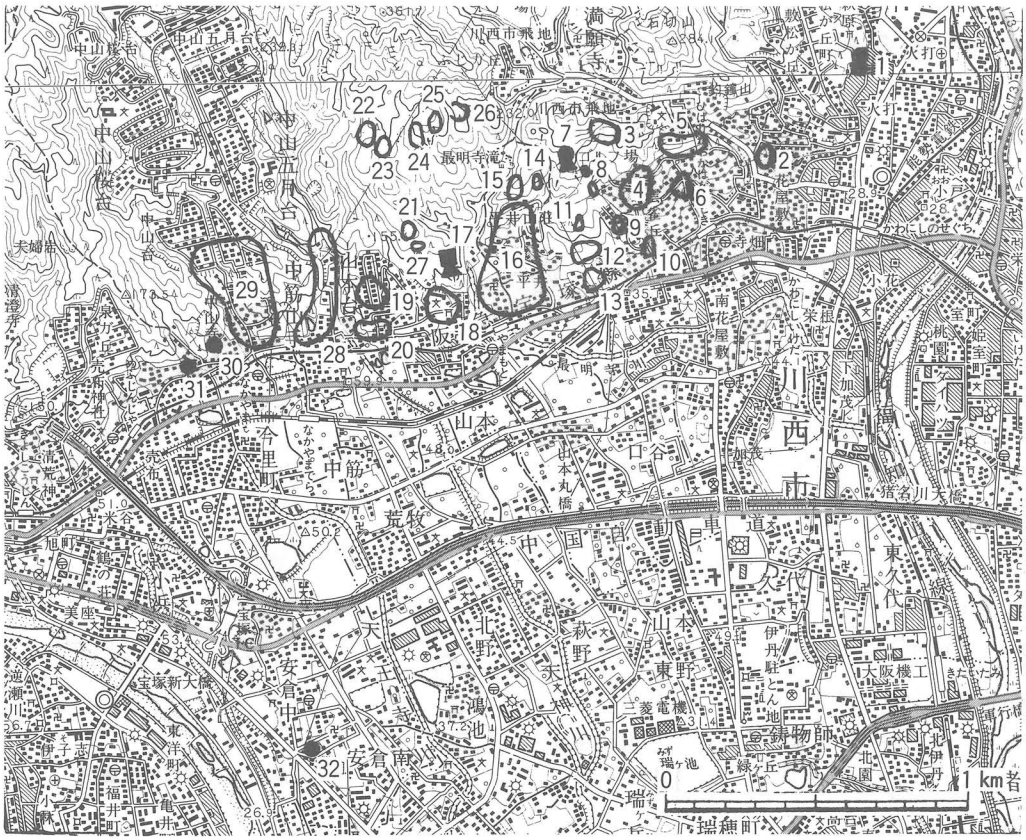
Ⅱ　長尾山丘陵周辺の環境

兵庫県南東部と大阪府西部にわたる地域に位置する西摂平野は、北は北摂山地、東は千里丘陵、西は六甲山地に囲まれ、南は大阪湾に面している。この平野の東部に猪名川、西部に武庫川が南流し、それらにはさまれた伊丹段丘は細かな起伏のある洪積台地である。

長尾山丘陵はこの西摂平野の北、北摂山地に属し、そのうちの猪名川以西の、比較的ゆるやかな丘陵である。この丘陵の南の尾根を勅使川、最明寺川、天神川が流れ、猪名川や武庫川と合流する。

この一帯標高50ｍから200ｍ付近には約200基に及ぶ古墳の存在が知られている。

前期のものとしては宝塚市万籟山古墳①と呉の紀年銘鏡を出土した宝塚市安倉高塚古墳②があげられる。中期に入ると、前方後方墳といわれる宝塚市長尾山古墳③があげられるが、あるいは前期とも考えられており、その他に中山寺境内に「安産の手洗鉢」として知られる舟形石棺④が遺存するのみである。後期には、川西市勝福寺古墳⑤や、長尾山丘陵南斜面の数々の群集墳などが築かれる。長尾山の古墳群は川西市豆坂古墳群⑥を東端に、最明寺川以東に雲雀山西尾根⑧、雲雀山東尾根⑨、⑩、平井⑪の４古墳群、最明寺川と天神川の間の地域に今回調査した山本および、山本奥⑫の２古墳群が、天神川・勅使川間の地区には中筋山手⑬、中筋山手東の２古墳群がそれぞれ分布している。その他



第２図　天満神社古墳周辺の古墳分布図

1 勝福寺古墳
2 豆坂古墳群
3 雲雀丘古墳群Ａ支群
4　同　Ｂ支群
5　同　Ｃ北支群
6　同　Ｃ南支群
7 万籟山古墳
8 雲雀山東尾根古墳群Ａ支群
9　同　Ｂ支群
10　同　Ｃ支群
11 雲雀山西尾根古墳Ａ支群
12　同　Ｂ支群
13　同　Ｃ支群
14 平井古墳群Ａ支群
15　同　Ｂ支群
16　同　Ｃ支群
17 長尾山古墳群
18 山本古墳群Ａ支群
19　同　Ｂ支群
20　同　Ｃ支群
21 山本奥古墳群Ｂ支群
22　同　Ｃ支群
23　同　Ｄ支群
24　同　Ｅ支群
25　同　Ｆ支群
26　同　Ｇ支群
27　同　Ｈ支群
28 中筋山手東古墳群
29 中筋山手古墳群
30 中山寺白鳥塚古墳
31 中山荘固古墳
32 安倉高塚古墳

単独墳として中山寺境内の白鳥塚古墳⑭、八角形墳の中山荘園古墳⑮が存在する。

なお、古墳時代の集落遺跡としては、川西市加茂遺跡⑯、下加茂遺跡、小戸遺跡⑰、栄根遺跡⑱などが弥生時代から続く遺跡として知られている。

＜註＞

① 宝塚市教育委員会『摂津万籟山古墳』（宝塚市文化財調査報告第７集） 1975年

② 梅原末治「小浜村赤烏七年鏡出土の古墳」『兵庫県史跡名勝天然記念物調査報告』第14輯 1939年

③ 梅原末治「中山寺一其ノ境内ノ古代ノ遺跡遺物」『兵庫県史跡名勝天然記念物調査報告』第17輯 1930年

④ 橿本誠一「長尾山古墳外形測量調査報告」『兵庫県埋蔵文化財調査集報』第１集 1971年

⑤ 川西市教育委員会『川西市史』第４巻 1976年

⑥ 岡野慶隆「川西市花屋敷出土の須恵器」『兵庫考古』第14号 1981年

⑦ 関西学院大学考古学研究会「長尾山の古墳群Ⅰ」『関西学院考古』第４号 1978年

宝塚市教育委員会『長尾山の古墳群調査集報』（宝塚市文化財調査報告第14集 1980年）

石野博信「宝塚市長尾山古墳群」『兵庫県埋蔵文化財調査集報』第１集 1971年

⑧ ⑦の石野に同じ

関西学院大学考古学研究会「長尾山の古墳群Ⅲ」『関西学院考古』第６号 1980年

関西学院大学考古学研究会「長尾山の古墳群Ⅳ」『関西学院考古』第８号 1987年

宝塚市教育委員会『宝塚市雲雀山古墳群』（宝塚市文化財調査報告第６集 1975年）

⑨ ⑦の石野に同じ

⑩ ⑧の宝塚市に同じ

⑪ 宝塚市教育委員会『平井古墳群分布調査報告書』（宝塚市文化財調査報告第２集 1975年）に同じ

⑫ ⑦の「長尾山の古墳群Ⅰ」に同じ

⑬ 宝塚市教育委員会『宝塚市史』第４巻 1977年

⑭ ③に同じ

⑮ 『中山荘園古墳発掘調査報告書』（宝塚市文化財調査報告第18集 1985年）

⑯ 『摂津加茂』（関西大学文学部考古学研究第３冊 1967年）

川西市教育委員会『川西市加茂遺跡』 1982年

同 『川西市加茂遺跡第81～83・85～91次発掘調査報告』 1988年

⑰ 川西市教育委員会『小戸遺跡第６次調査概要（現地説明会資料）』 1989年

⑱ 兵庫県教育委員会・川西市教育委員会『栄根遺跡』 1982年

川西市教育委員会『川西市栄根遺跡―第19次発掘調査報告―』 1989年

Ⅲ　長尾山の古墳群の調査・研究動向

―1980年代以降を中心として―

長尾山に数多く分布する古墳・古墳群に関し、ウィリアム・ゴーランドの白鳥塚・山本古墳群の研究をはじめとして、これまで数多くの調査・研究がなされてきた。

当研究会においては、1976年以降、長尾山の古墳群を対象として調査・研究を行ってきたが、以下、最近の調査・研究動向についてのべてみたい。

これまでの調査・研究を総括的に振り返ってみた場合、最も注目すべきものに1959年の石野博信氏による雲雀山東尾根古墳群Ｂ支群の発掘調査があげられる①。この調査によって一支群を完掘したという点に加え、この支群が七世紀代の無袖の横穴式石室と箱式石棺を内部主体とした古墳で構築されていることがわかり、注目される。またこの調査結果を資料とした論文も数多く発表されている②。

1980年には、直宮憲一氏が、当時の段階での長尾山の古墳群の特質および展開を総合的に述べられている③。

1982年には、浅岡俊夫氏によって平井窯跡の調査報告がなされた④。

同じく1982年に宝塚市教育委員会によって宝塚市埋蔵文化財分布調査が行われた⑤。

白石太一郎氏は同年、畿内の群集墳について、消滅時期による三種類の型式分類を行い７世紀の第２四半期から一部第４四半期に消滅する古墳群を「長尾山型」とされ、雲雀山東尾根古墳群Ｂ支群を代表例とされている⑥。

1983・84年には、宝塚市教育委員会によって中山荘園古墳の発掘調査が行われた⑦。

中山荘園古墳は、天皇陵とされる古墳以外では、数少ない八角形墳で、特異な石室形態から築造年代は７世紀第２四半期初め頃と考えられている。また当古墳は飛鳥地方の八角墳とは性格が異なり、地方的色彩の強いものとされている⑧。

1984年から1985年にかけて、当研究会は、1979年に続いて⑨雲雀山西尾根古墳群Ｂ支群の実測調査を行った⑩。また、同古墳群は1988年に宝塚市教育委員会によって一部の古墳を除いて発掘調査が行われ、各古墳の存在の確認とともに内部主体、築造年代なども明らかにされ、新たな古墳も発見された⑪。

1987年には奈良大学により山本奥古墳群Ｃ・Ｈ支群の発掘調査が行われ⑫、Ｃ支群はいずれも円墳で、無袖の横穴式石室であり、２基が基本的なペアとなる11基６支群から構成されていることがわかった。Ｈ支群１基も墳丘の大部分が破損しているが、無袖の横穴式石室を内部主体にしている。

同じく1987年に、岡野慶隆氏が、1979年に続いて⑬横穴式石室の平面企画としての倍数企画法を畿内の主要な横穴式石室において検討され、古墳の系譜と編年を考察されており興味深い⑭。

以上、現在に至るまでの最近の調査・研究動向を述べてきたが、今後も研究会では、引きつづき長尾山に関する調査活動を行う方針である。

＜註＞

① 石野博信「宝塚市長尾山古墳群」『兵庫県埋蔵文化財調査集報』第１集　1970年

② 水野正好「雲雀山東尾根古墳群の群構造とその性格」『古代研究』４（元興寺仏教民俗資料研究所考古学研究室）　1974年

岡田務「畿内における終末期の群集墳の一形態」『古代研究』４

木下保明「七世紀型古墳について」『考古学論集』第１集（考古学を学ぶ会）　1985年

③ 直宮憲一「西摂における群集墳の成立とその展開」『藤井祐介君追悼記念考古学論集』　1980年

④ 浅岡俊夫「宝塚市平井窯跡分布調査報告」『大阪文化誌』14号　1982年

⑤ 宝塚市教育委員会『宝塚市埋蔵文化財遺跡分布地図及び地名表』（宝塚市文化財調査報告第８集）1983年

⑥ 白石太一郎「畿内における古墳の終末」『国立歴史民俗博物館研究報告』第１集　1982年

⑦ 宝塚市教育委員会『中山荘園古墳発掘調査報告書』（宝塚市文化財調査報告第19集）　1985年

⑧ 直宮憲一「西摂における終末期古墳の一様相」『末永先生米寿記念献呈論文集』　1985年

同「宝塚市中山荘園の多角形墳について」『市史研究紀要たからづか』３号　1986年

同「八角墳再考」『網干善教先生華甲記念考古学論集』　1988年

⑨ 関西学院大学考古学研究会「長尾山の古墳群（Ⅲ）」『関西学院考古』６号　1979年

⑩ 関西学院大学考古学研究会「長尾山の古墳群（Ⅳ）」『関西学院考古』８号　1987年

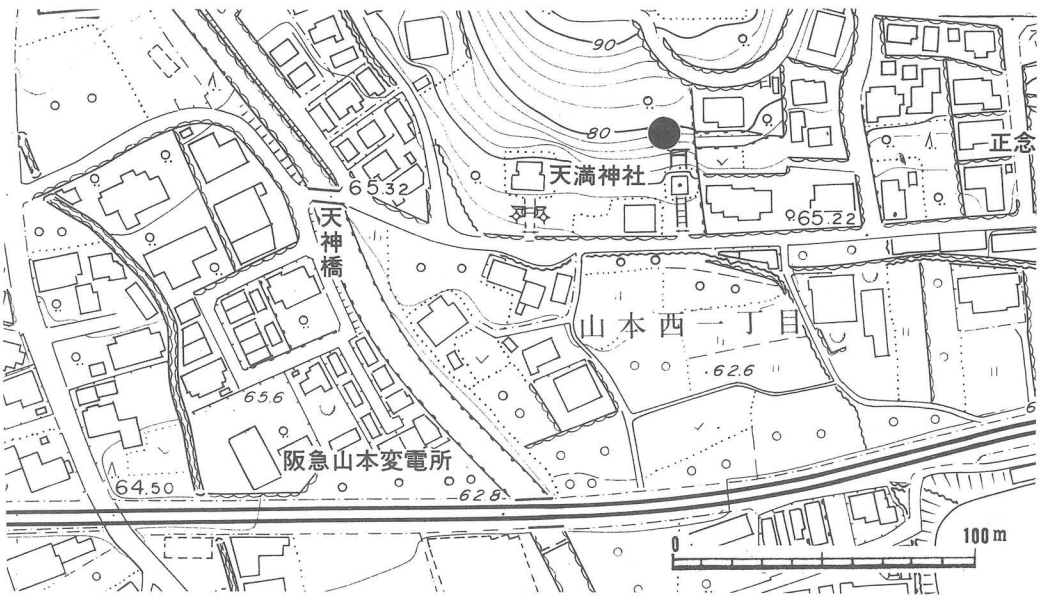
⑪ 宝塚市教育委員会『雲雀山西尾根古墳群発掘調査報告書』　1991年

⑫ 宝塚市教育委員会『宝塚市山本奥古墳群発掘調査（現地説明会資料）』　1987年

⑬ 岡野慶隆「横穴式石室の平面企画について」『関西学院考古』６号　1979年

⑭ 岡野慶隆「横穴式石室の平面企画についてⅡ」『関西学院考古』８号　1987年

同「長尾山丘陵における横穴式石室」『市史研究紀要たからづか』６号　1989年



第３図　天満神社古墳位置図

Ⅳ　調査の経過

1989年５月３日～４日
　石室実測のための石室内部の割り付け作業を行う。
５月５日～９日・13日～15日
　石室実測を行う。
６月３日
　墳丘測量のためのレベル・ポイントを設定する。
６月18日
　平板ポイントを設定する。
６月25日
　墳丘測量を行う。
７月１日
　墳丘測量を行う。
７月21日
　墳丘測量を行う。
８月６日
　雨天のため、ミーティングの後解散。
８月12日～13日
　墳丘測量を行う。
８月17日
　墳丘測量を行う。
10月10日
　墳丘測量を行う。
10月28日
　地形測量作業の後、細部の観察、周辺の踏査を行う。
　これをもって、現地の作業を終了する。

Ⅴ　調査の概要

（１）　山本古墳群の概要

長尾山丘陵に存在する後期古墳のうち、東端を最明寺川、西端を天神川によって区画された地域に、山本古墳群および山本奥古墳群が存在する。このうち特に、尾根裾部にＡ、Ｂ、Ｃの三つの支群に分かれて分布しているのが山本古墳群である。

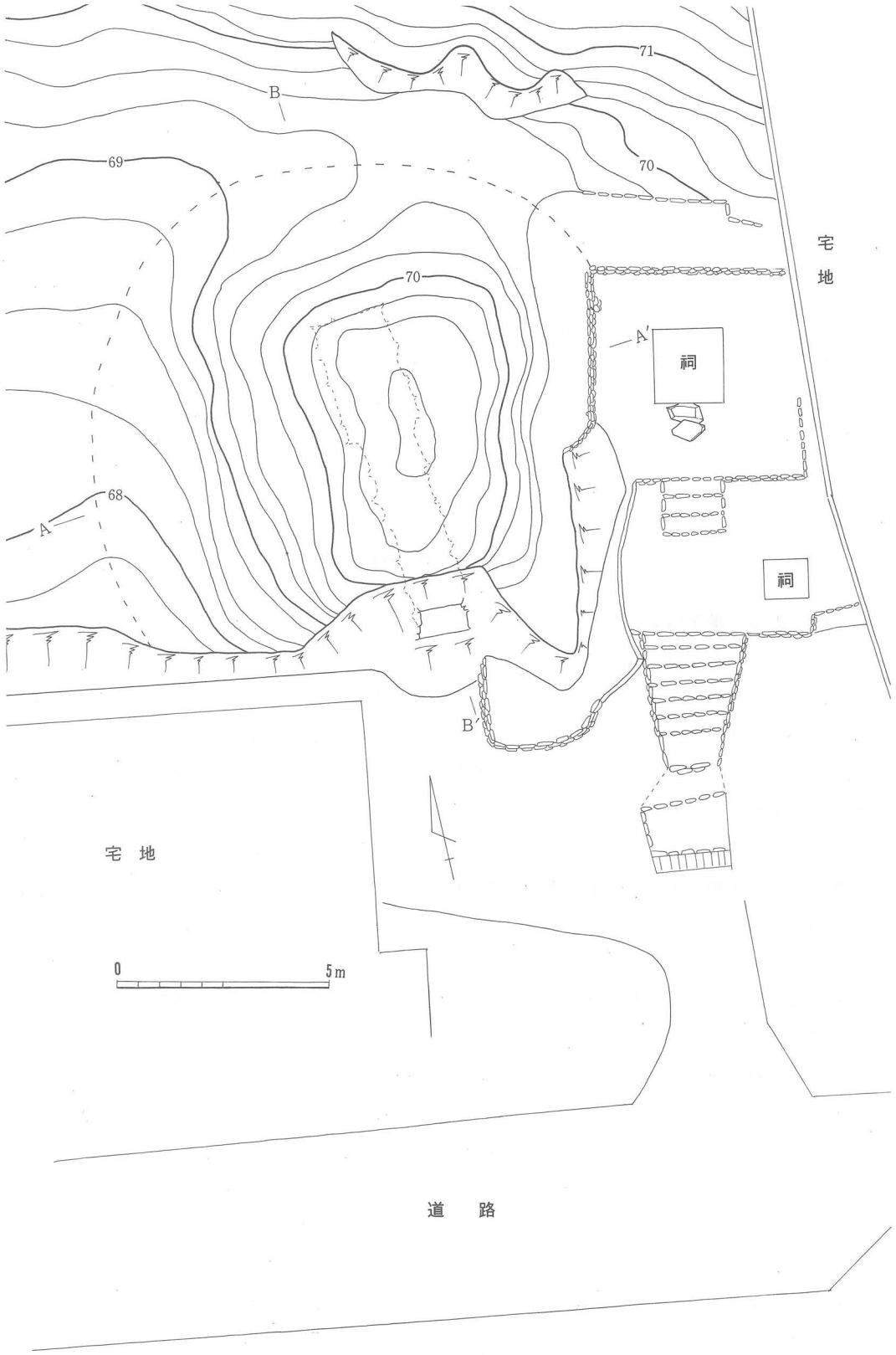
山本古墳群のうち、現存するものはＡ、Ｃの各一基のみであり、その他は宅地開発のために消滅している。この、Ｃ支群に現存する一基が天満神社古墳である。

山本古墳群の想定復元基数は、Ａ支群５基、Ｂ支群11基、Ｃ支群４基の計20基である[①]。これらはすべて６世紀後半の築造と考えられている。

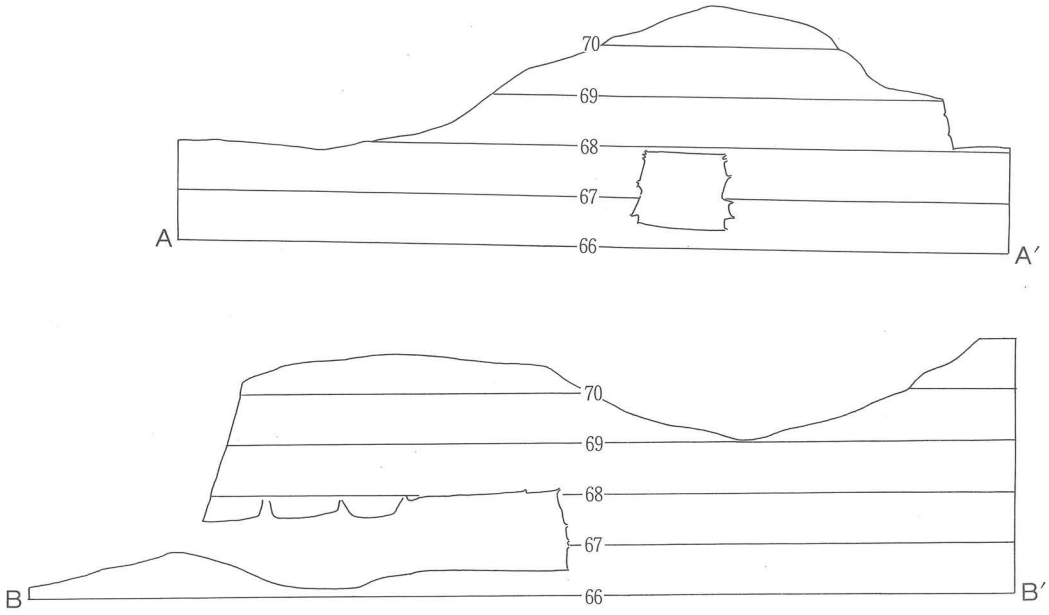
この山本古墳群に関する研究はほとんどなされておらず、古くはゴーランドによる陶棺片を出土した古墳の報告があり、近年では長尾村作成の分布図、石野氏の研究、宝塚市史の記述、そして最も新しいもので、同市の分布地図および文化財資料第５集の記述がある程度である。

＜註＞

① 宝塚市教育委員会『宝塚市史』第４巻　1977年



第4図　天満神社古墳墳丘測量図



第５図　墳丘断面図

（２）　古墳の調査結果

＜墳丘＞（第４図・第５図）

墳丘は南北にのびる丘陵の裾部に位置し、その斜面を利用して築かれたと考えられるが、東・西・南の三方向に宅地、神社境内などの造成による地形の改変を受けており、ほとんど旧状を留めていない。とくに南側の削平は著しく、内部主体を切り取る形で、石室羨道部が露呈している。東・西の両側も、比較的ゆるやかにではあるがやはり削平をうけている。

以上のように三方向に削平を受けることで、墳丘は一見方墳状を呈するが、現存する北側の状況から、この古墳の墳形は円墳であり、標高69.25ｍに基底線をおくと考えられる。その規模は径約14ｍ、高さ1.5ｍである。

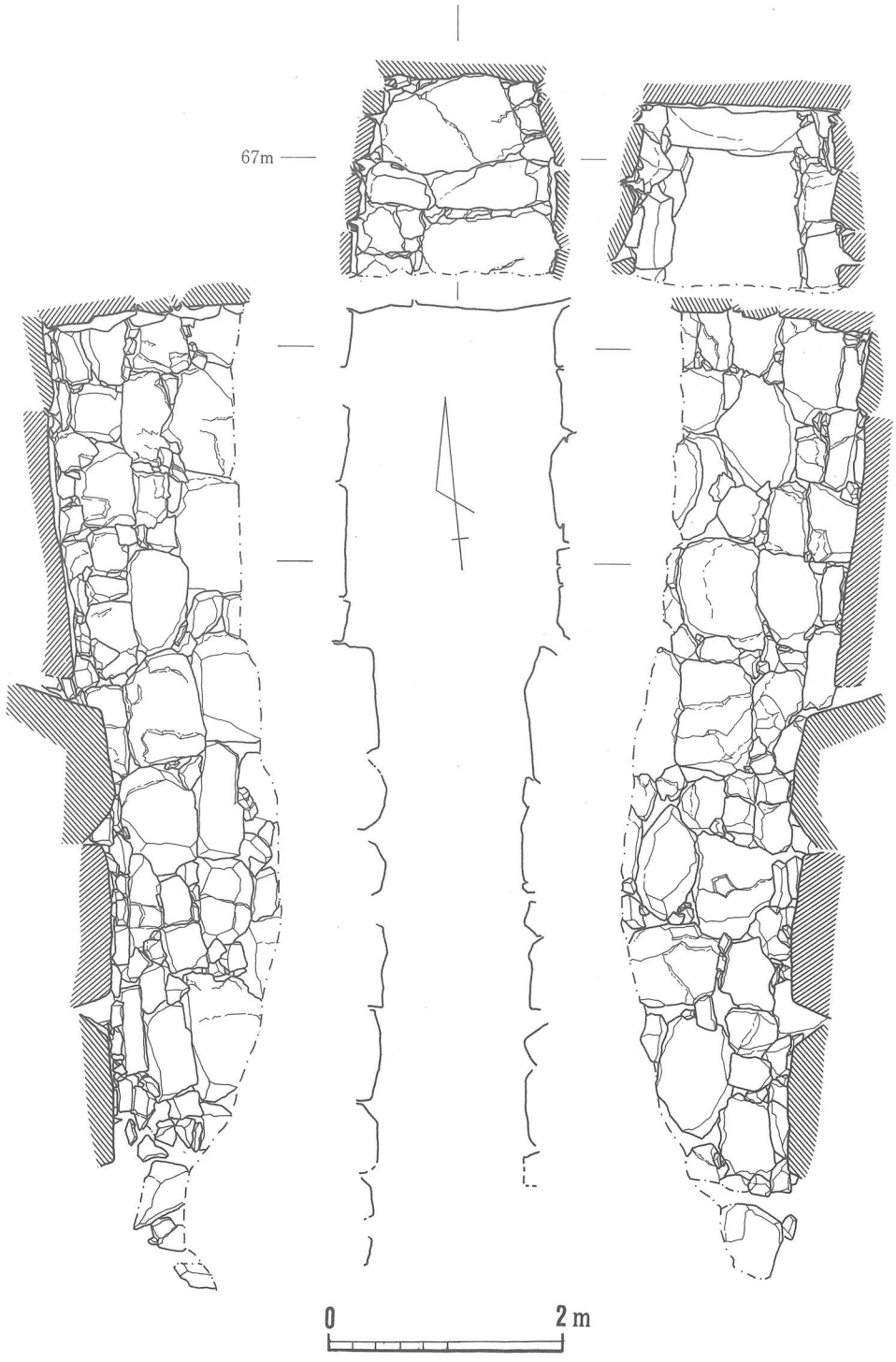
＜石室＞（第６図）

石室は宅地造成の際、羨道の一部が切り取られ、また開口部からの流土が堆積しているが、石質の保存状態は比較的良好である。

石室は主軸をＮ－６°－Ｗにとり、南に開口する横穴式石室である。その規模は、玄室幅が奥壁で1.7ｍ、玄門部で1.82ｍ、玄室長2.72ｍの玄室に幅が玄門部で1.37ｍ、開口部で1.11ｍ、長さが右側壁で5.24ｍ、左側壁で5.14ｍの羨道が付随するものである。現状高は玄室で約1.5ｍ～1.6ｍ、羨道で約1.4ｍ～1.5ｍを測り、開口部では流土のため約0.7ｍとレベルがあがっている。

石室の平面は、玄室でやや台形気味の長方形をなし、奥壁幅にくらべ、玄室長が短いのが特徴である。玄室はゆるやかに持ち送っている。

石室の構築法でみると、３段積みの奥壁は２段目までは各２石で構成され、三段目に大型の石一石を積んでいる。



第6図　天満神社古墳石室実測図

側壁は、玄室では三～四段積み、羨道では二～三段積みで構成されており、基底部と二段目まではやや大型の石を用い、天井石、石ごとの隙間を人頭大の栗石、割り石で解消している。

天井石は玄室で２石、羨道部は３石で構成されているが、側壁の状況から築造当初もう一石存在したと考えられる。

Ⅵ　ま　と　め

今回調査を行った天満神社古墳は、山本古墳群Ｃ支群に現存する唯一の古墳である。そのため群単位の調査は不可能であったが、今回の調査についてまとめてみると、

(1)　天満神社古墳は最明寺川と天神川に区画された地域の尾根裾部に位置する径約14ｍ、高さ５ｍの円墳である。

(2)　内部主体は南に開口する両袖式の横穴式石室で、規模は約８ｍである。当古墳は奥壁幅に比べ玄室長が短く、長さ／幅の比率は1.5に過ぎないのが特徴である。

(3)　このような玄室の比率をもつ古墳は、他の長尾山丘陵の古墳では、雲雀丘Ｃ北４号墳の1.6と中筋山手東２号墳の1.5のみである。①

(4)　石室の形態から、当古墳の築造は６世紀末頃と考えられる。

なお、山本古墳群の測量データとして、1897年にウィリアム・ゴーランドが行った調査の記録が残されているが、②、その石室の数値が当石室と近いものであることから、天満神社古墳自身のデータであるか、あるいは同様の企画をもつ古墳が山本古墳群内に存在したとも考えられる。

＜註＞

① 関西学院大学考古学研究会「長尾山の古墳群Ⅰ」『関西学院考古』４号　1978年

② 宝塚市教育委員会『宝塚市史』第４巻　1977年